

中日異類婚における因縁について：『聊齋志異』 と『御伽草子』との比較を通して

著者	姚 阿玲
著者所属(日)	平安女学院大学国際観光学部
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	14
ページ	27-36
発行年	2014-06-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001311/

中日異類婚における因縁について

—『聊齋志異』と『御伽草子』との比較を通して—

姚 阿玲

要 旨

仏教の因縁が中国と日本の異類婚姻譚の成立に作用している。本稿は中国の『聊齋志異』と日本の『御伽草子』を手がかりとして、両国の異類婚姻譚における因縁の相違を考察し、以下のように要約した。まず、因縁に関する感知は、『聊齋志異』において、男性側は自覚性が薄い。『御伽草子』において、性別を問わず、男女とも因縁を感じている。次に、因縁の存在実態について、『聊齋志異』において、因縁が定められたものであり、仏教の宿命論と儒教の天命観の影響で形成してきたものである。『御伽草子』において、因縁も仏教の宿命論の影響で定められたものであるが、主人公たちの主観的な嘆きのように見える。最後に、因縁の結末について、『聊齋志異』には離別型と円満型の二つがあるのに対して、『御伽草子』には一つしかなく、主人公たちが出家するということである。

はじめに

異類婚とは人間と人間以外の物（動物・植物・器物・鬼怪・神仙などの超自然物）の婚姻あるいは恋愛関係を題材とする説話である¹⁾。中国古典文学において、異類と人間との交渉は極めて古い時代から現れている。東晋に成立した『搜神記』の卷一・卷十四・卷十八などにすでに異類婚の話が存在する。その他に、『夷堅続志』・『誠齋雜志』・『異苑』・『广古今五行記』・『后漢書』・『漢書』・『三国遺事』・『灯下雜談』・『北夢瑣言』・『括異記』などの古典作品にも異類婚の話が見いだせる。一方、日本の異類婚姻譚の最も古い例として『古事記』の「三輪山神話」だと言われている。「三輪山神話」のみならず、『日本霊異記』上巻二・中巻八・十二・三十三などにも異類婚も登場する。また、『古今著聞集』巻二十に、『風土記』における常陸国的那賀の里や肥前国の松浦の郡や播磨国の託賀の里などに異類婚の作品が散在している。

異類婚は両国の宗教的、倫理的思想の反映のみならず、作品が作成された時代の社会現実や当時の人々の考え方も内包していると言っても過言ではない。これまで、異類婚に関する研究は中日両国で盛んに行われている。しかし、中日両国の異類婚に関する比較研究はほとんど存在しない。中日の異類婚を取り上げて比較することは両国における宗教や婚姻制度など、さらに社会文化などにおける差異を探究することに繋がり、有意義である。

1 研究対象 —『聊齋志異』と『御伽草子』

本稿で研究対象として、中国の『聊齋志異』²⁾と日本の『御伽草子』³⁾を取り上げ、異類婚を比較の視点から検討する。『聊齋志異』は人鬼妖狐を題材としている中国清の時代の有名な怪異小説であり、異類婚がその重要な内容の一部分である。数字を以て示せば、500あまりの短篇からなる『聊齋志異』に異類婚が84篇あり、6分の1強を占めている。一方、『御伽草子』は日本室町時代から江戸時代まで作られた絵入りの短編物語である。国文学者市古貞次氏の分類によると、①公家物②僧侶・宗教物③武家物④庶民物⑤外国物⑥異類物の六種類に分類が可能で、異類物はそのなかの一種である。異類物をさらに分ければ、人間と同じ行為を異類にさせる擬人物と、異類と人間との婚姻を主題にし

た作品と二種類に分類が可能である。異類婚姻譚も『御伽草子』の重要な一部分だと言うまでもない。

両作品は創作の時代がかなり近い。また同じく異類物が散在している。しかし、両作品の比較研究はあまりなされていない。筆者の調べた結果、中国で、『聊斎志異』と『御伽草子』との比較は見つからない。日本でも、両作品を比較し、ともに研究された論文は一件しか検索できなかった。それは安藤皆子「御伽草子『玉水物語』考 —『聊斎志異』封三娘との比較」であるが、異類婚には言及されていない。従って、本稿は両作品における異類婚を比較する考察を試みる。

2 因縁について

異類と人間の婚姻関係が維持できるかどうかにはさまざまな要因がある。因縁という要素が常に中日の異類婚に現われ、異類と人間を繋ぐために重要な役割を果たしている。因縁という言葉が仏教からのものであり、仏教の因縁観は仏陀が紀元前 500 年頃、インドで道弘法師によって語られた⁴⁾。「長阿含経」巻一には、

從生有老死、生是老死縁：生從有起、有是生縁；有從取起、取是有縁；取從愛起、愛是取縁；愛從受起、受是愛縁；受從觸起、觸是受縁；觸從六処起、六処是觸縁；六処從名色起、名色是六処縁；名色從識起、識是名色縁；識從行起、行是識縁；行從痴（無明）起、痴是行縁……（《大正大藏經》第一卷、頁七中、下）⁵⁾

とあり、いわゆる十二因縁である。

仏教の考えによって、世界中の万物には必ず何かの因や縁によって結ばれたと言う。生起と縁滅が出てくるのである。「仏教では、因と縁、または因と縁も同じ意味（因即縁）ということの一つに結びつけたもの、広くは原因一般をさす。すなわち、すべては縁起している、つまり因縁によって生じる（因縁生）と説き、因縁は仏教思想の核心を示す語である」⁶⁾。

中国の文献に出る〈因縁〉に関しては、『史記』の「田叔列伝」に「（任安）少孤貧困、…未有因縁也」とあり、晋の葛洪の『抱朴子・刺驕』には「因縁运会、超越不次」とあり、蘇軾の「上蔡省主論放欠書」には「尋常無因縁」などとある。「田叔列伝」における「因縁」が機会、チャンスの意味であり、「因縁运会」のそれがたよりの意味であり、「尋常無因縁」のそれが原因と解釈される。こうして、「因縁」が「つて」・「よすが」・「かわり」・「機縁」・「ゆかり」・「原因」など多数の意味に解釈される。さらに、前世の運命、宿命などの意味が数多くの文学作品に取られている。

それに対して、日本語の因縁は広辞苑⁷⁾に次のように解釈されている。①〔仏〕ものごとの生ずる原因。因は直接的原因、縁は間接的条件。また、因と縁から結果（果）が生ずること。縁起。転じて、定められた運命。「前世からの —」②きっかけ。動機。しかるべき理由。「— 大事」③由来。来歴「いわれ —」④ゆかり。関係。縁。「浅からぬ — があった」

中日両国において、因縁の意味が相似している。仏語の原因であることが一致している。また、定められた運命の意味や由来や関係などの意味も似ている。しかし、中国の因縁はもう一つの意味がある。中国語の古文においては、「因」は「姻」であり、「因縁」は「姻縁」となる。すなわち、婚姻と関係付けられるのである。この意味は日本語の辞書には存在していない。さて、両作品において因縁の表現はどうであろうか。

3 両作品における因縁の表現

仏教が広がると共に、因縁思想が自然に中国と日本の多岐にわたる分野に染み込んでいく。文学作品も例外ではない。『聊斎志異』における因縁が「夙因」「夙分」「宿分」「夙縁」「夙盟」「情縁」「有縁」「前因」という形で表現された。その例⁸⁾が次のようである。

例①「胡四姉」：「汝兩人合有夙分」（お前さんたちは前世からいっしょになる縁がきまっていた）

例②「狐夢」：「畢郎与有夙縁，即須留止」（畢さまとは宿縁があるのですから、ここに泊まって明日の朝早くお帰りなさい！お寝坊するんじゃないよ！）

例③「公孫九娘」：「無傷、彼与舅有夙分」（大丈夫よ！あの人とおじさんとは、前世からの縁があるんですから！）

ほかにも、「青鳳」、「蓮香」、「狐妾」などの25⁹⁾の短編に因縁の表現が見られる。これらの言葉を日本語に訳すと、ほとんど「因縁」、「夙縁」になっている。

一方、『御伽草子』では、因縁はほとんど「他生の縁」、「前世の契り」、「五百生の契り」、「先の世の契り」などで表現されている。例を見よう。

例④「木幡狐」¹⁰⁾：「是もせんせの、しゅくえんと、おほしめし」

例⑤「浦島太郎」¹¹⁾：「二世の縁と申せば、たとひこの世にてこそ、夢幻の契りにて候ふとも、かならず来世にては、一つの蓮の縁と生れさせおはしませ」

例⑥「鶴の草子」¹²⁾：「ぜんぜのちぎり、あさからず。のちの世かけてたのましく。かみのさでめし、なかなれば」

例で示したように、「木幡狐」における「宿縁」や、「浦島太郎」における「二世の縁」や、「鶴の草子」における「前世の契り」などが前世から定められた宿縁、因縁などに関するものである。ほかにも、「玉水物語」や「貴船の本地」などの作品に因縁に関する表現が多く散在している。

両作品には、因縁に関して、理由、由来などの意味が薄く見え、仏教の前世から定まった運命と解釈されているのがほぼ一致している。

4 因縁に関する感知

(1) 『聊斎志異』において

『聊斎志異』では「男女の関係の成立が因縁によった」と指摘したのは、主人公である異類側の女性からか、あるいは主人公の男女を除いた他者である。人間（男性）¹³⁾のほうがすべて受け身の形で因縁を受けたように描かれている。

例⑦「張鴻漸」：の短編には、狐が「私は狐仙（仙道を得た狐）なんです。あなたとは、前世からの宿縁があっていっしょになったのです」と正体を自白したとき、主人公の張鴻漸が「女の美しさにひかれて、やはりそのままいっしょに暮らそうと思った」。夙縁があるから、張はそのまま受け取っている。

例⑧「狐妾」：という短編には、主人公の劉が「舍妹与君有縁、愿无弃葑菲（うちの妹はあなたとご縁がありますの。どうか葑・菲をお見捨てくださいますな）」と言われた時、「つらつらながめてみると、輝くあでやかさは類いがなく、とうとうわりない仲になった」とある。ここにも、劉氏はやはりそのまま女との縁を持ち続けたのである。こういうように、人間側が因縁に関する感知は常に自分から悟ったのではなく、他者から指摘されてから初めて感知したのである。つまり、男性のほうが因縁への自覚性が薄い。これは『聊斎志異』における因縁観の大きな特徴の一つだと考えられる。

これまで見てきたように、人間側はそのまま宿縁を引き受ける理由としては、もっぱら女性の美しい姿のためである。たとえ女が異類だと分かっている、美貌さえであれば、狐からの変身や、鬼からの変身だと知っていても、男に嫌われることなく、むしろ大切にされている。そのような例は枚挙に暇ない。「胡四姉」の「四姉自言為狐、生依恋其美、亦不之怪」（四姉は自分は実は狐だと言った。尚はしかしその美しさに魅せられていたので、それを別にどうとも思わなかった）、「青梅」での「倘得佳人、鬼且不惧、而況于狐」、（美人が手に入るなら、幽霊だってかまわないさ。ましてや狐ならね！）とあるものもその例である。もう一つの例をみよう。「双灯」という短編には、主人公の魏が

突然に来訪した女が狐だと分かった、「身の毛がよだち、顔を伏せたまま、斜めに見てみることをさえない」ほど怖かった。だが、その狐である女が「すらりとしていて仙女のように美しい」と見るやいなや、一目惚れになり、女と契りを結んだ。こうして、最初に異類だと知って怖く感じていたが、実際目に映した女の美貌に惚れて、怖さなどが忽ち忘れられたのである。これらの例からみれば、異類の女性との縁が認められるかどうかの理由は「女は姿こそ」という点に限られると窺えよう。

要するに、『聊齋志異』の異類婚における男性は因縁の受け側として表現され、因縁への自覚が薄い。そして、因縁を引き受ける最大の根拠は女性の美しい姿にほかならない。異類婚での異類はほとんど妾であって、正妻ではない。当時の男性は正妻を選択する時、容姿よりその家族の地位、財力のほうを重視するのである。それに対して、妾は男の遊び相手になっていて、地位より美貌のほうが大事である。つまり、中国の封建社会では、男はかなり優位にあり、妾の女を「遊びの相手」にしたので、責任など取らなくてすむと、作品から読み取れる。この現象は当時の社会が男性を中心にする文化を反映したものであろう。

(2) 『御伽草子』において

因縁に関する自覚が『聊齋志異』においては男側に薄いことを前節で指摘した。『御伽草子』はそれと異なり、男女ともに因縁への自覚性が強く書かれている。

『御伽草子』における異類婚での因縁の感知は主に次の二種類に分けられる。その一は、契りを結んだ後の感慨。例えば、「つぼの碑」に「さりなから、この三とせ、なれにし、人なれは、よしよしなにも、さきの世よりの、きえんなるへしと、思ふにも、(中略) …しののめのそらも、ほのほのと、あけゆけは」とあり、「むらくも」には「ささの一夜の、むつ事も、五百しやうの、ちきり、そてのひりあはせも、この世ならぬ、えんそかし」などとある。その二は、絶別を前にする際の感慨である。例えば、「雁の草子」では、女が男の雁の正体を悟った後、因縁を嘆き出したのである。「いし山にこもり、わか身の、たよりなかりし、うれへを申しに、つたなき、せんせのしゆくしうにて、人ならぬつはさに、むすひあはせ給ひけるちきり」とある。

以上の二場面において、因縁に関する感知が一つは男性から感慨され、もう一つは女性から提出された。この点では、『聊齋志異』とは異なり、『御伽草子』での因縁の感知は性別を問わず、契りを結んだ男女両方ともその縁を感じている。

日本文学の最高峰とされた『源氏物語』の「桐壺」や「夕顔」「須磨」「葵」などの帖においても前世の報いや前世の因縁などへの嘆きが散在している。光源氏などのような男性からの溜め息もあれば、紫の上などのような女性からの詠嘆もある。そのほか、『日本霊異記』や『堤中納言物語』などにも見かける。つまり、日本従来の古典文学には、因縁への嘆きをするのは男のみではなく、女も同時にそれを行う。『御伽草子』の異類婚にも同様な傾向が表れている。

5 因縁の存在実態

(1) 『聊齋志異』における因縁

『聊齋志異』における因縁は既存性を持っている。『聊齋志異』に描かれた因縁は男女二人が前世からのものであり、その夙縁がまだ終わってないので、現世もそれを償うべく異類が来訪したものが多。そして、一旦、その償いが終わると、女は去っていく。「荷花三娘子」での、「夙業償満、請告别也」(前世からの業の償いを果たしましたから、おいとまさせていただきます)、「小翠」での「以我两人有五年夙分、故以我来報曩恩、了夙愿耳」(わたしたちは五年間夫婦になる前世からの宿縁がありましたため、わたしは前のご恩に報い、宿願を果たしにまいっただけです)などはその例である。いわば、前世から残された、縁が果たされたら、主人公たちは去っていかなければならないのである。

そして、『聊齋志異』における因縁のほとんどは儒家思想の「数」と関連している。ここでの「数」は「天数」、「定数」つまり、自然の命数、自然の運命を指している。「縁」と「数」の例としては、枚挙に暇がない。例えば、

例⑨「青鳳」：此天数也，不因顛覆，何得相从？（これは運命というものでしょうね。災難がなかったら、どうしてごいっしょになれるわけがございましょう。）

例⑩「双灯」：姻縁自有定数，何待説也（姻縁がちゃんと決まっているのですもの、何もいうことなんかないわ。）

例⑨「青鳳」では、災難のため主人公たちが一緒になった。これが運命の定である。また、例⑩「双灯」も、世の中の因縁に左右されたものであり、誰もそれを変える力がないと語っている。

このように、すべての因縁は定められたものである。男と女が一緒になるのは縁でなければならない。加えて、男と女の間に「別れる運命」に定められているとするなら、それも避けることができない。すべての縁が前世において定められている。異類であっても、人間であってもそれに逆行するわけにはいかない。

このような思想が『聊齋志異』の異類婚には散在している。稀に、その定めを打ち破ろうとするものもあるが、結局失敗に終わる。「蕭七」の短編の最後には、次のようなセリフがある。「登門就之，或人定勝天不可知。」（いってやりましょうよ。人の力が天の定めに勝てるかもしれないわ）。だが、主人公の徐が無理やりに自分と縁のない女を求め、契りを結んでいこうとしたところ、そのとき「にわかには大地をゆるがすほどのかん声が聞こえ、火の光が戸のあいだからさしこんだ」という。それは狐の女が獵人に発見され、追われた場面である。いくら人間が努力しても、運命を変えようとしても、結局、無駄に終わるということである。

また、男女の間にある因縁ができた場合、それを引き離そうとしても失敗に終わるだけである。「小翠」の中では、小翠は公子にさまざまに尽くすが小さなミスで公子の親にひどく叱られ、毅然とその家を離れた。だが、小翠と公子の因縁はまだ終わっていないため、公子と必然的に再会を果たす。小翠が言った通り、「今与大姉遊戯、又相邂逅、足知前因不可逃也。」（今お姉さんと遊んでいたところでした。またこうしてめぐり会ったのも、前世からの因縁で、逃げられないことがわかりますね）。こうして、小翠と公子との関係も縁によって再度結ばれたのである。

前述の例から、縁が天数によるものであり、定まったものである。前世の縁だからこそ、外力によっては切られるものではない。その反側も同様である。孔子は『論語』の「季氏」篇で、こう語った。「君子有三畏、畏天命、畏大人、畏聖人之言」（君子に三畏あり。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏れる）。その第一は天命つまり天数である。儒家思想では、天命は定まったものなので、逆らうことはできない。そして、仏教思想では、人間には前世・今生・来世という三世があると考えられている。因縁が前世のものなので、すでに決まっていて、今生にも繋がっていく。そのような儒家の天命観と仏教の宿命論は『聊齋志異』の作者蒲松齡の頭のなかで融合し、その世界観を形成してきたのである¹⁴⁾。『聊齋志異』の異類婚における因縁の特徴が儒家の天命観及び仏教の宿命論の二重影響の下で形成したものであると考えることができる。

(2)『御伽草子』における因縁

「浦島太郎」における異類の女が以下のように言う。「一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むことも、みなこれ他生の縁ぞかし。ましてや、はるか波路を、はるばると送らせ給ふこと、ひとへに他生の縁なれば、何かは苦しかるべき、わらはと夫婦の契りをもなし給ひて、同じ所に明し暮らし候はんや」。つまり、よろずのものが因縁から逃れられない。男と女との出会いもそうだとすることである。前述の異類の女の話と類似した話は他の作品にも出ている。例えば、「貴船の本地」に、「せんしある

やうは、いしゆのかけにやとり、一河のなかれをくむたにも、他しやうの、えんなり。一ときちきるも五百しやうの、ちきりといふ。一しうきうにたまれみあるうへは。くるしからすと、御ゆるしありければ」とある。男女の契りは三生両世と深く関わっていて、その縁は前世からのものであり、今生乃至来世に伸び続けるのである。言わば、夫婦間の契りは一瞬のことであっても、それはかならず前世から引き続いている縁であり、さらに後世へも続いていく縁である。この点において、『御伽草子』における因縁は『聊斎志異』のそれと類似性を示している。

しかし、『御伽草子』における因縁は『聊斎志異』のように、前世の客観的に存在している因縁を強調しているのではなく、むしろ主観的なもののように見える。『御伽草子』では、前にも分析したが、因縁への感知は主に二種類に分けられ、いずれも男女たちはその因縁を事前に知っているのではなく、契りを結んだ後あるいは出会った後、何らかのことに感無量で、溜息するか、あるいは別れを前にして、そういう短い因縁への切ない気持ちで、思わず嘆く。このような主観的な嘆きは仏教の宿業思想と関わっている。

宿業とは、「過去の行為、過去世における業。前世の生存においてなされた善悪の行為の力」¹⁵⁾である。つまり、現在の「行」を過去の「業」に追及している宿業の意識である。中世の人々が儚い世の中に、現在の「業」を過去に求めたかのようなのである。男女の間に結ばれた契りあるいは出会った原因が過去の「業」と関連付けられ、主人公の嘆きとなっている。それによって、現在の「業」に対する罪悪感あるいは悲しさなどの心理から解放されるわけである。ここの「業」は宿世の罪障でも解釈できる。

「宿世の観念にもとづくところの、三世にわたる因縁果報の秩序は、原則的には悪因苦果であるから、現前の憂悲苦悩はすべて「宿世」の罪障に由来するはずである」¹⁶⁾。『御伽草子』の異類婚において、主人公たちの嘆きは現前の苦悩であり、宿世の罪障に関わるはずである。平安朝文学で、その宿世罪障に言及しているのが少なくない。『源氏物語』に関するある論考の中に次のようにある。「光源氏と朧月夜内侍の密通事件で、光源氏は政治上の罪科を問うことは困難であり、それは「倫理的な罪」「罪障（宿世の罪）」とされている。藤壺との恋愛もそうである」¹⁷⁾。また、光源氏とはほかの女性の葛藤も過去の因縁に原因があると作品から読み取れる。紫の上にとってはそれが辛い事実であったとしても、それで受け入れるしかない。そこに一つの無力さが感じられる。庶民性に富んでいる『御伽草子』の異類婚では貴族の宿世罪障とは異なっているが、現前の別れの辛さ、縁をいつまでも続けない悲しさという「苦果」を前世に「悪因」があったからであろうとする宿業意識は共通する。

この点において、『聊斎志異』は異なっていて、主人公たちが出会ったり別れたりするのはすべて因縁によるものであるから、嘆くことはない。『御伽草子』においては、宿業思想の影響で、主人公たちが罪悪感や苦しみや悲しみなどを感じ、それらのものから解放するため、何らかの仏道に関わる手段を取らなければならない。主人公たちは最後ほとんど出家という道を選び、『御伽草子』の異類婚を一つしかない結末にした。結末について、次の節に詳しく述べる。

以上、両作品における因縁は仏教の宿命との関係に触れた。『聊斎志異』においては、因縁と「数」（運命）との繋がりが緊密で因縁のあり方が客観的である。『御伽草子』においては、すでに存在したはずの因縁が主人公の主観的なものと扱われ、過去の業に関連付けられていることが確認できる。

6 因縁の結末

(1) 『聊斎志異』において

『聊斎志異』の異類婚で、因縁で結ばれた男女の結末は大きく分けて、二つある。

①縁の結末 — 離別型

『聊齋志異』においては男女の縁が終わった場合はほとんど異類の女がそのまま男を残して、別の世界に去っていく。残された男には残念な気持ちがあるが、元の生活に戻って暮らしを続けていく。例えば「双灯」で、魏（男性）は「胸のふさがる思いで帰ってきた」、「蕭七」で、徐（男性）も「悲しい気持ちを抱いて帰ってきた」、「張鴻漸」でも、「しばらく彼は茫然と立っていた…そのまま道をいそいで帰った」と描かれる。いずれにしても、女が去った後、男たちは惜しい気持ちを抱えながら、元の生活に戻った。男性にとっては、縁が終わった以上、本来の帰着場所に帰るのは当たり前のことだと考えられる。ここで言う帰着場所とはすなわち正妻のいる家である。男性は振られても往く場所が確保されるのである。

②縁の結末 — 円満型

『聊齋志異』では、男女の縁が継続する例も少なくない。「小謝」一篇に妻とした人が死んだが、その夫婦の縁がまだ終わっていないので、その死んだ妻の幽霊が別の女性の体を借りて、再度元の夫と夫婦の生活をつづけその男性が科挙の試験に合格目出度い結末を迎えるという話が存在する。また、「五通」¹⁸⁾の中で、金という男性が竜王女と別れたが、縁のためか三十年後蓮の上に座っていた女 — 竜王女と再会した。今度は金は一人去っていかず、竜王女が乗った蓮の葉に飛び入って二人で一緒に人の目から消えてしまった。もう一つの例を見よう。「楽仲」の短編では、楽仲が琼華とともに死んだ。それで、その縁がすでに終わったように思われたが、実際はそうではない。二人の去った情景を作品の中で作者が次のように書いた。「仲の股から光が出てあたりをてらし、琼華の棺からは、かぐわしい霧が噴きでてあふれ、近隣一帯に匂った」。琼華はもともと散花仙女だから、死んだといっても、天の世界に戻るに過ぎない。一方、楽仲は親孝行ぶりが世間に評判になったため、死んだ後、不思議な光が出た。それが琼華とともに天上に昇る瞬間の現象である。つまり、同時に死んだ二人はその後もずっと一緒にいると推測することが可能である。

こうして、『聊齋志異』に出た異類婚の結末を二種類に纏めた。それは離別型と円満型である。離別型は、因縁が終わって、異類が「他界」に去り、人間がもとの生活に戻る。それに対して、円満型は、往々にして、因縁がまだ残っているため、必ずいつか何かのきっかけで再会に恵まれ、その後、異類が人間の世界に来て人間と一緒に暮らすか、人間が異類と共に異類の元の世界「他界」に移るなどする。

(2)『御伽草子』において

前述の『聊齋志異』と異なり、『御伽草子』における異類婚の結末はほぼ離別型である。しかも、ほとんど同じパターンで描かれている。つまり破局を迎えた時、異類婚における主人公が仏道に入り、出家するというのが主なパターンである。

たとえば「鼠の草紙」には、人間の女が最初そのまま清水観音から示した縁を受け取ったが、相手が異類の鼠と分かった後、庵室を結んだ。鼠の権頭もあまりの悲しみに出家の道に入った。面白いことに、最後の鼠は自分にとっては天敵である猫と一緒に出家した点である。「雁の草子」には、雁に変身した男性が獵人に射殺された話が見られる。それを知って、女性がやはり出家の道を選んだのである。「木幡狐」にも、狐のきしゅ御前は家に犬を献上されてから、やむをえず家を離れ、最後に出家を遂げたのである。

『御伽草子』に出た男女の縁が断った行方は家を離れ、仏道に入ることしかできないようである。「平安時代末、平氏が政権をとって以来、武家が政治の中心となったが、権力をめぐる戦乱が相次ぎ、政権はめまぐるしく交代していく」¹⁹⁾。「社会の変革と混乱の中で現世の無常を感じる人々の前に、新

しい仏教が次々とおこった。念仏、あるいは題目を唱えることで浄土に導かれ、救われるというものである。新仏教はたちまちのうちに武士や庶民の間に広まった。この仏教的な無常観を背景にして人生や人間、社会を見つめて描いた文学が、中世を特徴づけている²⁰⁾。仏教がその当時の人々の生活の隅々まで染み込んでいる。婚姻の破局にとどまらず、挫折か失敗などに面するとき、人間の行動は仏教からの影響も窺える。特に、世の中の起き事に対する無常の意識。『平家物語』では、建礼門院の出家、『義経記』で静御前の出家などみなそうである。『御伽草子』がこのような時代背景のもとで、数多くの人によって創作され、異類婚の作品にも仏教思想の影響から逃れることはできない。特に、因縁において、続けられない縁から生じてきた悲しみを忘れるため、仏道を選ぶのはもっとも利便性が高い。

『聊齋志異』においては、そのまま別れを受け取っているのに対して、『御伽草子』には出家を選ぶのが普通である。その差の理由は両作に書かれた社会背景にあるのだろう。

『聊齋志異』のそれは天命論と宿命論の二重影響のもとで形成されたものである。作品の中で「姻縁自有定数」「聚必有散、固是常也」「世縁俱有定数；当来推不去、当去亦挽不住」などのような言い方のように、因縁は定めなので、別に悲しくなくてもいい。縁が終わったら、女のほうは去って行って、男のほうは自分の帰属場所に戻ったり（正妻と一緒に暮らし続ける）、あるいは新しい女性と因縁をつけたりする。儒家の天命論では、人間の力は天に勝てず、因縁に対しても天命に従うほかない。作品を通して、作者は因縁が定まったものなので、出会うのも別れるのも運命的で、別に嬉しくなったり、悲しくなったりする必要がない。このようなメッセージを伝えようとしているのではないか。一方、『御伽草子』で、因縁はいったん終わったら、残されている側、男であれ、女であれ、あまりの嘆きに沈んで、結局仏の道に入るしかない。出家の選択によって、主人公たちは往生を遂げ、真の仏理を極めている。それは観音の利生方便を唱えるために設定されているのかもしれない。『御伽草子』の異類婚だけでなく、稚児物語や本地物等においてもよくそれを唱えているため、物語を異なっている方向へ導いて、最後の目的はやはり仏教の利生方便に留まる。ここからみれば、日本中世の時代の仏教繁盛、人々の信仰生活の実態も窺えると思う。

おわりに

本稿では、中国の『聊齋志異』と日本の『御伽草子』両作の異類婚における因縁を見てきた。因縁への感知や因縁の存在の実態、因縁がもたらした結末などに関してかなり相違点が存在している。『聊齋志異』の因縁観は従来の仏教における因縁についての考え方の影響を受けながら、儒家の天命観をも受け入れ、さらに清の時代での男性を中心とする文化の背景のもとで形成されてきた産物と考えられる。一方、『御伽草子』のそれは日本中世の宿世意識の反映であり、仏教からの影響が深く仏教から始まって最後も仏教に帰着する。

以上のごとく、結論をまとめたが、未だ不足の点が多々あり、中日異類婚への研究にも余地がまだ残っている。ここで筆を置くこととし、更なる検討は今後に期する所存である。

〔キーワード〕 中日 異類婚 因縁 聊齋志異 御伽草子

注

- 1) 異類婚の定義について、いろいろな論説がある。筆者は前人の研究を踏まえて、異類婚を人間と人間以外の物の婚姻あるいは恋愛関係を題材とする説話だと見なす。
- 2) 『聊齋志異』の構成について、八巻、十二巻及び十六巻の版本がある。本稿で十二巻の版本を用いることに

した。作者は蒲松齡（1640-1715 年）

- 3) 『御伽草子』が狭義に渋川清右衛門が刊行した 23 篇を指しているが、『御伽草子』における異類婚をより整合的に把握するため、本稿で取り上げるのが広義に室町時代を中心とした中世小説全般である。
- 4) 張貴松：試論《紅樓夢》中佛教因縁觀的運用及其意涵文苑天地、p3
- 5) 同 4
- 6) 中村元（など編） 仏教辞典（第二版）2002 年、東京、p63
- 7) 新村出（編）広辞苑 岩波書店（第六版）、2008 年
- 8) 本稿全般、『聊齋志異』の引用された例について、中国語の原文は 1998 年上海古籍出版社によって出版された『聊齋志異』によるものである。日本語訳は昭和 45 年平凡社によって出版された『聊齋志異』を参照した。訳者は増田渉・松枝茂夫・常石茂等である。
- 9) 筆者のまとめによると、『聊齋志異』の異類婚において因縁に言及する短編は 25 篇ある。次のようである。
「胡四姉」・「連瑣」・「狐妾」・「羅刹海市」・「公孫九娘」・「狐諧」・「双灯」・「鴉頭」・「狐夢」・「武孝廉」・「西湖主」・「蓮花公主」・「荷花三娘子」・「小謝」・「蕙芳」・「蕭七」・「阿英」・「仙人島」・「阿繡」・「小翠」・「張鴻漸」・「天宮」・「長亭」・「葛布」・「粉蝶」。
- 10) 大島建彦（校注訳）御伽草子東京：小学館、1995 年
- 11) 同 10
- 12) 横山重・松本隆信（昭和 57 年）室町時代物語大成九角川書店
- 13) 筆者の考察で、『聊齋志異』の異類婚において、人間側が男性であるのに対して、『御伽草子』においては、男性もいれば、女性もいる。
- 14) 黄治。《聊齋志異》与宗教文化濟南：齊魯書社、2005 年、p99. 原文は中国語である。筆者訳。
- 15) 中村元（など編） 仏教辞典（第二版）2002 年、東京、p497
- 16) 小野村洋子。「あはれ」の構造についての試論 — その広さと奥行きの整序のための序論として。共立女子大学文芸学部紀要。第 19 輯。昭和 47：p48
- 17) 武原弘。光源氏の須磨流謫について：宿世意識の深化の過程。Studies in Japanese literature 31. 1996、p29-38
- 18) 二つの短編があるが、ここで言っているのはその二である。
- 19) 張如意。日本文学史。河北大学出版社、2006：p60-61
- 20) 同 19

参考文献

- 大島建彦（校注訳）（1995 年）御伽草子集小学館
- 蒲松齡（1998 年）聊齋志異上海古籍出版社
- 蒲松齡（昭和 45 年）聊齋志異（上・下）（増田渉・松枝茂夫・常石茂等訳）平凡社
- 横山重・松本隆信（昭和 57 年）室町時代物語大成三・四・五・八・九・十・十二・十三、角川書店
- 蒲松齡。（増田渉など訳）（昭和 38 年）聊齋志異（上・下）平凡社
- 景印文淵閣四庫全書（電子版・全文版）（1999）上海人民出版社
- 神田龍身・西沢正史（編者）（平成 14 年）中世王朝物語・御伽草子事典 勉誠出版

Fate in the Buddhism's Beliefs in Chinese and Japanese Marriage Stories between Humans and Non-humans : A Comparative Study on *Ryosaissi* and *Otogizosi*

YAO, A Ling

Fate in Buddhist beliefs plays an important role both in Chinese and Japanese tales of marriage between humans and non-humans. This paper aims to compare Chinese and Japanese tales based on *Ryosaissi* and *Otogizosi*. And this paper sums up the following differences of fate between *Ryosaissi* and *Otogizosi*. Firstly, male characters in *Ryosaissi* seldom recognize the element of fate, while female characters are more likely to sense this element either by themselves or through others. On the other hand, in *Otogizosi* both male and female characters often associate everything that has happened between them with fate. Secondly, fate portrayed in *Ryosaissi* reflects a Buddhist belief that everything has been predestined in the previous life and it is also under some influences of Karma, whereas in *Otogizosi*, fate is acknowledged subjectively by both male and female characters. Finally, *Ryosaissi*, have tales with a happy ending and ones with a sad ending. By contrast, in *Otogizosi* the endings are often times tragic with main characters choosing to become a monk or a nun.